

二〇〇三年度

博士学位論文

俳諧の比較文学的考察

越境の詩学 ― 茶とクローレル

早稲田大学大学院教育学部研究科教科教育学専攻

マツハタ・ローレン

目次

はじめに.....

第 部 一茶俳諧の詩学

第一章 一茶句の音調論.....

この入声語学の視点から

第二章 『父の終焉日記』の文体にみる比喩表現.....

第三章 一茶句と近世民謡.....

一茶句碑の調査に基づいて

第四章 句碑研究・翻訳.....

第一節 全国一茶句碑の最新リスト(三〇四墓)／この入声語訳 出題付老.....

第二節 『父の終焉日記』この入声語訳(全文).....

第 部 クロートル晩年の俳諧的表現

第一章 ポール・クロートルの『百韻帖』.....

西洋語における「余情」の可能性

第一節 詩集の付会的な連関性.....

第二節 冒頭一章の注釈.....

第三節 『百韻帖』日本語訳(全文).....

第二章 ポール・クロートルの『日本短詩集』(*Petits Poèmes japonais*).....

共同的詩作の可能性

第一節 『日本短詩集』にみるクロートルの創作姿勢.....

第二節 『日本短詩集』の出題研究・全訳付老.....

付 一 一茶句試論.....

A. “無国籍俳人”小林一茶 B. 菜畑の衣服 近世の隠微し一茶

付 二 国際ハイクについて.....

A. この入声語圏のハイクの多様性について B. 北アメリカのハイクを詠む

C. 俳句からハイクへ、そして再び俳句へ

初出一覧.....

あとがき.....

初出一覧

第 部 一茶俳諧の註考

第一章 一茶句の音韻論 二のへく語の視座から

「 同 」 ぺりかん社『江戸文学』一七号・二〇〇一 九

第二章 『父の終焉日記』の文体にみる比喩表現

「 同 」 俳文会発行『漫談俳諧研究』一〇〇号・二〇〇一 二

第三章 一茶句と近世民謡 一茶句碑の題意に繋ぐ

「 同 」 ぺりかん社『櫻切美生先生日記終焉文集』（仮題）二〇〇四 二（予定）

第四章

第一節

全国一茶句碑の最新リスト 二のへく語訳 出冊待ち

俳文出版『一茶の句碑 全国句碑最新目録 出冊 二のへく語訳 『貫行帖』

Haïku gravés dans la pierre inventaire des stèles poétiques dédiées à Kobayashi Issa

日本・二のへく同時出版 二〇〇二 四 4/2003

第二節

『父の終焉日記』二のへく語訳（全文）

パリ大学（第七）東洋学部日本文学科修士課程免状論文 二〇〇一 一〇

Mémoire de D.E.A, Dép. d'études de l'Asie Orientale, Université de Paris VII, 2001

第 部 クロツル晩年の俳諧的表現

第一章 ポール・クロツルの『百韻帖』 西洋語における「余情」の可感性

第一節 詩集の付会的な連関性

「 ポール・クロツルの『百韻帖』 詩集の付会的な連関性を中心に 」

芸文堂『文学』・二〇〇一 一・二

第二節 百韻 一〇章の注釈

「 ポール・クロツルの『百韻帖』 百韻 一〇章の日本語訳、注釈、解説 」

『早稲田大学大学院教育学部研究紀要』別冊一〇号 一・二〇〇一 九

第二章 ポール・クローデルの『日本短詩集』(Petits Poèmes japonais) 共同的作品の可能性

第一節 『日本短詩集』にみるクローデルの創作姿勢

「『日本短詩集』(Petits Poèmes japonais) 共同的作品の可能性をめぐって」
日本クローデル研究会発行『L'oiseau Noir』一一号 一〇〇三―四

第二節 『日本短詩集』の出典研究・全訳付表

「『日本短詩集』(Petits Poèmes japonais) 出典研究 翻訳」
日本クローデル研究会発行『L'oiseau Noir』一一号 一〇〇三―四

付一 一茶句試論

A. “無国籍俳人”小林一茶

「同」 俳句雑誌『選』一〇〇一、一〜六(連載)

B. 菜畑の一番 近江の露煙し一茶

「同」 一茶を学ぶ会発行『一茶さん』第七号(一〇〇一)

付二 国際ハイクについて

A. ココリス語圏のハイクの多様性について

「同」 国際俳句交流協会発行『HH』四四号 一〇〇一年七月

B. 北アメリカのハイクを読む

「同」 俳句雑誌『おしめかね』一五号 一〇〇〇年九月

C. 俳句からハイクへ、そして再び俳句へ

「俳句とハイクについて」

俳句雑誌『耕』一〇〇一年 頁

なお、本論を成すにあたり、草稿に加筆修正を加えている。

はじめに

本論文は一茶とクローデルの作品そのものを扱い、俳諧と西洋詩という二つのジャンルの境界・共通域について考察したものである。

西洋韻文では比喩表現（メタファーなど）や高調的技法（押韻、強調アクセントなど）の使用はたいくん重視視されてきたのであった。では、こうした表現法は俳諧においても中心的な役割を果たすことができたのだろうか。その一例として、一茶句の高調し『父の終焉日記』の文体にみる比喩表現をまろ論ずることにした。

一方、近世俳諧の作者について、最も問題にされてきた文法的要素は、季語や切字の使用よりも「風雅」として美字と「座」として作者の共同体に相応しい表現法を誠実に守ることであったのではないかと考えられる。まほ、風雅の豊饒さのひとつ、拙筆が羨望したとされている「句付」すなわち「余情付」という作法は、西洋韻文においても使用されることが可能であったとみられる。また、「座の文字」を土台とした共同的詩作は、西洋の詩人にも受け入れられることが可能であったのである。すなわち、ここでは、ポール・クローデルの『巨儒帖』や『日本短歌集』という晩年の作品をとり扱い、これらの点を検証した。

本論文では、江戸後期（一七六三―一八一七）の俳人小林一茶と、明治・大正・昭和初期（一八六八―一九五五）の詩人ポール・クローデルに対象を限定したが、両者とも俳諧と西洋詩という二つのジャンルの共通域を示すような表現が著しいものとみられ、これについて俳諧の比較詩学の基礎研究を試みたのである。

事実、一茶の俳諧作品の表現法を考察したところ、西洋韻文にみるような高調の重視や比喩表現の多用を俳諧にもみとめることができた。その意義は、一茶俳諧と近世民謡との関わりが大きな要因になっているといえるかも知れない。一方、俳諧の「余情付」（句付）や共同的詩作といった発想に近いものが、クローデル晩年の詩に著しいということもわかった。つまり、西洋の韻文に近い俳諧もあれば、俳諧に近い西洋詩もあり得るということになる。日本の俳諧は、特種な定型詩の伝統や言語的風景に頼っている面があるにもかかわらず、本質的には俳諧と西洋詩との相違は必ずしもハッキリとしたものではなく、むしろ両者に共通する接点を見出すことにおいてこそ、日本の俳人と西洋詩人との対等的な交流の場を認めることができるといえることになる。

近・現代俳句に関しては、その基礎を異にするという考え方があってもいいが、近世俳諧が近代俳句の母胎であるということには否定できないだろう。近・現代俳句においても、引き続き「余情」の問題が盛んに論じられてきたのである。また、連作や本歌・本句取を敬遠するようになった近・現代俳句においても、「俳句会」という日本特有の詩的共同体が未だに重要な組織として働

していることは事実である。拙著曰く「俳諧はなくともありぬべし。ただ世情に和せず、人情に達せざる人は、是を無風雅第一の人とすべし」（『続五論』）。つまり、日本の近・現代俳句においても、拙著以降の近世俳諧に適用するよちな「余情」や「共同的創作」といった特色が未だに豊富に観察できると思えられ、今回の考察の結果を、現代俳句・現代西洋詩・現代ハイクにも適用してみる必要があると思信しているのである。

おしがき

本論文における研究は、世界各国で展開している俳句・ハイクの国際化と直接には関係しないものに思われるかも知れない。しかし、ここで江戸後期の俳人小林一茶と近代のこのハズ詩人ポール・クロデルという両詩人を選んだのは、決して私意によるものではない。この二人は、俳諧と西洋詩というそれぞれのジャンルにおいて、まわめて大胆な表現法に挑戦し、それによって様々な問題を提起した詩人といえるのである。

今日、俳句の国際化を論じる場合、一般には「季語」「切字」といった俳句の要素をどのように他言語に翻訳され得るかについて考察することは第一の課題である。しかし、本来、俳句（少なくとも俳諧）の「真髓」と呼べるものは、こうした言語表現の技術的要素よりも深いところにあるのではない。つまり、近世俳諧の詩学的分析を試めることこそ、国際ハイクの可能性を考察するようになるのではない。たとえば、「季語」の本意をふまえるという創作姿勢は、共同的詩作法、共同的想像力によるものであり、また「切れ」をどうのえるという趣向は、連俳の位句から発展した表現意識であると思えるのである。今後、俳句の国際化を進めるにあたって、近代以前の俳諧の詩学的研究が必要不可欠であると確信し得るのである。

一方、西洋詩の比喩表現や押韻の多用に関しては、それらを否定せず、その根源にある美意識と日本詩歌（俳諧・連歌・和歌・民謡など）との接点を追つことも重要な研究課題であり、こうした研究によって俳諧と西洋詩との共通域を追究する工夫ができるのである。

最後に、俳諧の詩学的研究の必要性を教えて頂き、当初から終始一貫して親しくご指導を頂いた堀切美先生をはじめ、近世文学の魅力を教えて頂いた中嶋隆先生に心から謝意を捧げたい。また、日本学の方法を教えて頂いたシャクリーン・ビシヨー先生、ゼシル・サカエ先生、クロデル研究の初歩を導いて頂いた中條亨先生、内藤昌先生、比較文学会の若宮徹先生、川本皓嗣先生に多くの学恩を賜った。理想的な研究生活を可能にして頂いた文部省の競争金制度、早稲田大学国際センター・教育学研究科の暖かいサポートにも謝意を表したい。記して厚くお礼を申し上げます。